

地球物理学教室の近況 福田洋一教授（教室主任）

組織について；大学院理学研究科と理学部があって、われわれ教員は理学研究科に所属し理学部は兼担である。理学研究科に地球惑星科学専攻があり、そのサブ専攻として地球物理学分野（教室）と地質学鉱物学分野（教室）がある。専攻には専攻長と副専攻長がいて、両教室の教室主任が専攻長と副専攻長を1年交替で担当する。また、このほかに専攻主任がいて、主に大学院の学事を扱う専攻会議を主宰する。組織上は、以前のような第一講座、第二講座、・・・は無くなり、固体地球物理学講座、水圏地球物理学講座、大気圏物理学講座および太陽惑星系電磁気学講座の四つの大講座から構成されている。その下に測地学研究室、地震学研究室・・・など7研究室が並んでいる。附属地磁気世界資料解析センター、附属地球熱学研究施設は理学研究科の施設と認識している。大学院の方は少し名称が異なり、地球物理学分野が関わる分科としては、固体地球物理学関係の中に6つの分科、水圏および気圏物理学関係の中に3つの分科、地球惑星電磁気学関係の中に2つの分科、計11分科がある。このように組織が複雑であるため、来年度以降に再編を考えている。この他に協力講座に防災研究所と生存圏研究所の教員の一部が所属している。

教職員の人事関係について；現在の教室の教員は17名であり少ない。このほか、附属地磁気世界資料解析センターが3名、附属地球熱学研究施設が9名である。教室の事務系職員2名、技術職員1名、補佐員3名である。2007年3月で青木さんが退職、4月から吉田さんが事務主任になった。また、4月より助教授が准教授、助手が助教と名称変更された。4月30日に藤森さんが退職された。固体地球物理学講座の准教授人事を進めており、2008年4月1日着任予定である（4月1日付け、宮崎真一さんが着任され、教員数は18名になりました）。

主な行事・出来事について；全学ホームカミングデイは11月の第2土曜日に開催されることになった。このため平成20年度は11月8日（土）に開催される。12月下旬に、平成21年度S1号館北側の改修工事实施が決定された。完了後地物教室は全て1号館に集結する。事務室、図書室などは統合する。平成20年1月に専攻運営委員会の設置がきまり、運営、事務などを進めることになった。

主な学事；院入試を実施し、志願者47名から42名の合格者を決定した。学部学生の定員増によって29名になる。博士課程への進学者数は減少している。今後、修士の定員を減し、教育を充実させる。

教員定員のシーリング；定員は21名であるが、シーリングにより、現在、実際に運用可能なのは19名である。

運営交付金の予算が減少している。競争的資金の獲得が必要となる。反対に特任教授の任用も可能になる。

（コメント）第4講座がつぶれたことは問題である。地球資源研究拠点が無くなり関係一般産業界との結びつきを失った。そのような流れにあることを考えてほしい。